

特別展

東山魁夷 唐招提寺御影堂障壁画展

令和3年4月24日(土)～6月6日(日)

会期中展示替えを行います(障壁画は通期展示)。

〔前期〕4月24日(土)～5月16日(日)／後期…5月18日(火)～6月6日(日)〕

横浜で誕生し、3歳の年から東京美術学校に入学するまでの少年時代を神戸で過ごした東山魁夷(1908-1999)。郷土の誇りとして、神戸には東山魁夷をよくご存じの方が多数いらっしゃるでしょう。東山魁夷は著書『わが遍歴の山河』において、神戸について次のように回顧しています。「私の少年時代が幸福であったと今でも思えるのは、神戸には山があり海があったからです」また、「以前私を感じていたこの町の性格、はつきりした新しさと言った後では、漠然としたものになったことでしょう。ただ、私がこの街のことを最初に書いたのは、こんなに遠い日のことであり、又遠い土地になつて今でも、それが私の性格に大きな影響を与えていると思え

るからです。その後、時には全く異質のものになったように見えていながら、実は、ヴァリエーションであるかもしれないからです」と分析しています。神戸の街の記憶は、東山の創造の源の深いところで失われずにとどまっていたのでしょう。

絵を描くことが好きであった少年は、はじめ洋画家を志していました。が、日本画家であれば認めるといふ父の意見にしがたがって東京美術学校に進学し、やがて戦後を代表する日本画家となりました。清澄な色彩で描いた東山の風景画は人々の心をとらえ、国民的画家として親しまれています。

昭和39年(1964)、唐招提寺において鑑真和上千二百年忌を記念し、『鑑真和上坐像』(国宝)を安置する御影堂の建立が念願され、昭和45年、同堂の障壁画の制作が東山に託されます。東山はその責任の重さに即答を控えて考え続け、ついに制作の決意を固めたのは、およそ7か月後のことでした。

本展では、唐招提寺で鑑真和上の

命日にちなんで行われる開山忌舎利会の数日間のみ公開される障壁画、全68面を展示し、制作過程を示すスケッチや下図もあわせて紹介します。完成に至るまでの制作過程と長年の宿願であった水墨による障壁画の大きさ、そして、東山が鑑真和上に捧げた祈りの美に触れていただくことができるまたとない機会です。

唐招提寺御影堂における障壁画 第一期障壁画 《濤声》《山雲》

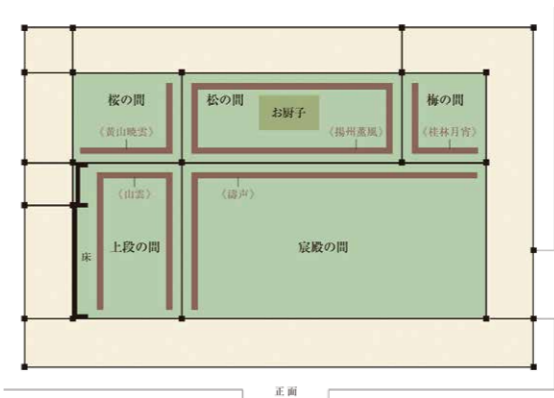


図1 唐招提寺御影堂平面図

襖などに描かれた障壁画は、設置する空間に合わせて制作されたものであるため、設置された建築の空間内において眺められた時が、真の姿で



上《松濤》/下《深山の樹》
いずれも昭和48年(1973) 紙本彩色
長野県信濃美術館 東山魁夷館蔵

れましたが、それらは、障壁画の最終イメージを創り上げていく過程において統合され、「象徴」へと抽象化されていきました。

第一期の障壁画は昭和50年6月に奉納されました。



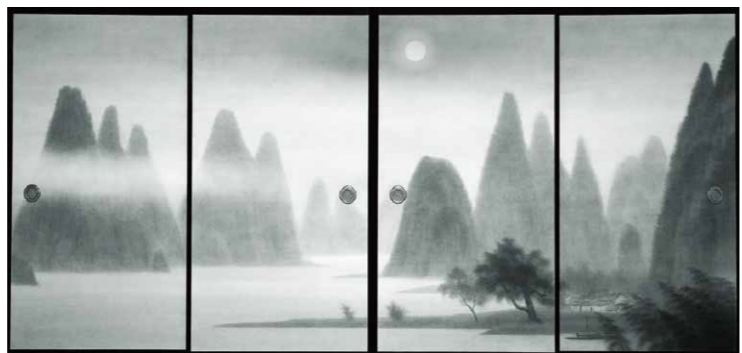
上 《唐招提寺御影堂障壁画 濤声》
下 《唐招提寺御影堂障壁画 山雲》
(いずれも部分) 昭和50年(1975)
紙本彩色 唐招提寺蔵

第二期障壁画 《黄山晓雲》《揚州薫風》《桂林月宵》

— 水墨画への強い憧憬 —

御影堂上段の間と宸殿の間の第一期障壁画を完成させた東山は、第二期障壁画として、鑑真和上像を祀る中央の松の間と梅の間に、中国の代表的な風景として黄山と桂林を構想します。鑑真和上に捧げる障壁画として、中国の風景が不可欠であるとした東山は、今度は中国の取材旅行へと旅立ちます。さらに、画技を追求する新しい試みとして、これまで本格的に手掛けていなかった水墨画で表現することとし、中国におけるスケッチでは水墨の技法に力を入れました。東山は、観る人それぞれの心が想い描く色彩と万感、より深い精神的共感を生み出すために、モノトーンである水墨で表現することを選んだのかもしれない。これにより、第二期障壁画は、鑑真和上の時代や和上が見ていたかもしれない過去の風景へとわたしたちを誘い、時空を軽やかに飛び越えさせる力を一層強めることになったのではないでしょう。

第二期障壁画は昭和55年6月に奉納されました。



《唐招提寺御影堂障壁画 桂林月宵》(部分)
昭和55年(1980) 紙本墨画 唐招提寺蔵



図2 タペストリー《濤声江月明》
昭和56年(1981) 製作 東山魁夷原画 当館蔵

す。建物に満ちた空気や周辺の環境は、わたしたちの五感を刺激し、作品の捉え方にさまざまな影響を与えます。襖を開き、次の部屋を望むときの重層的な眺め、移ろう日の光が室内に差し込むさま、足裏が捉える畳の感覚、堂の外で囀る鳥の声、虫の音、風の音。障壁画の印象が見る時々によって変化することも不思議ではありません。

「唐招提寺をたびたび訪れ、御影堂宸殿の間に座して、鑑真和上の事、律宗の根本道場として創建されたこのみ寺の厳格な寺風を想起していると、描くべき作のイメージが次第に浮かび上がってくるのを感じた」(『東山魁夷全集』第8巻 昭和55年発行「山雲 濤声」より)という東山の心に最初に浮かんだ障壁画のイメージは、上段の間に山を、宸殿の間に海を主題に描くことでした。

御影堂(図1・平面図参照)の正面、手前の2室にこれらのイメージを配することで、東山は、日本に上陸した時にはすでに盲目であったといわれる鑑真和上に、日本の国土の象徴としての山海の眺めを示そうと考えたのです。そして、この障壁画制作の準備のために、ある時期から一切他の仕事に着手せず、青森県から山口

ところで、当館にご来館された方はご存知かもしれませんが、1階ホールには、東山魁夷の原画『瀬江月明』により製作されたタペストリー(図2)を常設展示しています。第二期障壁画に関連する桂林の風景がモチーフになっていますので、あわせてご鑑賞ください。

展示室における障壁画

このたび、障壁画は建物から離れ、東山が構想した配置での再現展示はなされていませんが、展示室内では、スケッチをはじめ、試作、小下図、中下図、割出図などをあわせて紹介しています。これらを障壁画と対照することにより、障壁画完成までに、東山がいかに十分な準備をなしていたかということ、また、障壁画単独の鑑賞ではうかがいしれない創作の裏側を目的にすることができ、完成までに画家が費やした時間や情熱に想いを寄せていただくことは、展覧会の重要な目的のひとつです。そして、本展鑑賞後の近い将来、唐招提寺でこの障壁画と再会を果たしていただくことができれば、さらに深々と、この作品の世界に遊び、共感いただけるのではないかと考えます。(辻 智美)

伊能図上呈
200年記念特別展
伊能忠敬

令和3年7月10日(土)～8月29日(日)

寛政12年(1800)閏4月19日にはじまった伊能忠敬(図1・1745-1818)らによる全国測量事業。その成果品として、文政4年(1821)7月10日、孫の忠誨によって、幕府に「大日本沿海輿地全図」が上呈されました。

寛政12年(1800)閏4月19日は酒造業や金融業を営む商家でした。忠敬は、寛政6年(1794)、50歳のときに家督を息子に譲って隠居します。そして翌年には、江戸の深川黒江町(現東京都江東区)に隠宅を構え、幕府天文方の高橋至時に師事し、天文学や暦学を学びます。そのなかで、正確な暦を作成するために地球の大きさや日本各地の経緯度を知ることが必要だと考え、まずは浅草の暦局と深川黒江町の間を測量して緯度を算出しました。しかしながら、短い距離では誤差が大きくなること、正確な値を出すためにはもっと長い距離で行う必要があることを至時に指摘されます。そこで計画されたのが、蝦夷地(現北海

伊能忠敬と全国測量

上総国山辺郡小関村(現千葉県山武郡九十九里町)に生まれた忠敬は18歳のときに下総国香取郡佐原村(現千葉県香取市)にあった伊能家の娘・達の後配となります。伊能家

は酒造業や金融業を営む商家でした。忠敬は、寛政6年(1794)、50歳のときに家督を息子に譲って隠居します。そして翌年には、江戸の深川黒江町(現東京都江東区)に隠宅を構え、幕府天文方の高橋至時に師事し、天文学や暦学を学びます。そのなかで、正確な暦を作成するために地球の大きさや日本各地の経緯度を知ることが必要だと考え、まずは浅草の暦局と深川黒江町の間を測量して緯度を算出しました。しかしながら、短い距離では誤差が大きくなること、正確な値を出すためにはもっと長い距離で行う必要があることを至時に指摘されます。そこで計画されたのが、蝦夷地(現北海



図1 「伊能忠敬像」
千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵

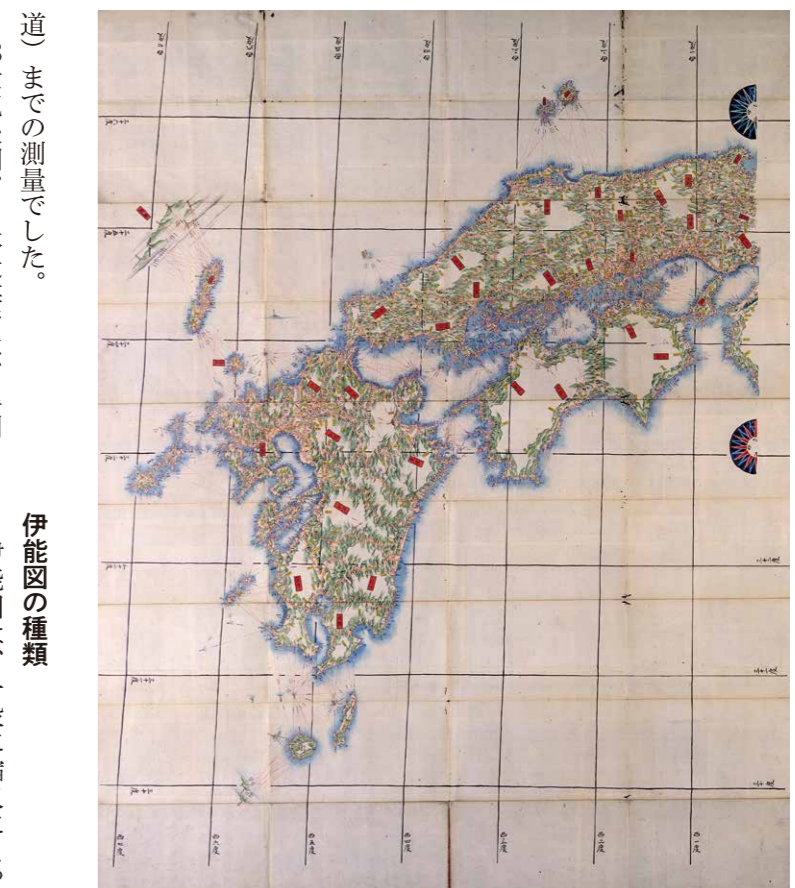


図2 「伊能小図 西日本」文政4年頃(1821)当館蔵

伊能図の種類

18世紀後期、日本近海では、異国船の来航が増加しており、幕府にとって海岸防備は喫緊の課題でした。そこで至時は、頻繁にロシア船が出没していた蝦夷地の測量と地図の作成を幕府に願ひ出て、その実務担当者として忠敬を推薦したのでした。この蝦夷地測量が、以後足かけ17年に及ぶ、忠敬の全国測量のはじまりとなります。

伊能図は、一般に縮尺によって大図、中図、小図、特別小図の4種類に大別できます。大図は1町を1分(約1/36,000)、中図は1里を6分(約1/216,000)、小図は1里を3分(約1/432,000)のスケールで表現したものです。特別小図は、小図をさらに1/2の縮尺としたものです。幕府への上呈に際しては、大中小のそれぞれの図が殿中の大広間で披露されました。また、測量の記録書

である『大日本沿海実測録』14巻もこの時にあわせて上呈されています。

この分類のほか、伊能図は作成の時期や経緯によって、①幕府に上呈された正本、②伊能家が持っていた控本、③針穴がある完成度の高い副本、④江戸時代に模写された写本、⑤正本などを作成する途中で作られた下図や稿本などに分けることができます。

このうち、正本は明治6年(1873)5月皇居の火災によって焼失しました。その後、伊能家から提出された控本は大正12年(1923)9月の関東大震災によって焼失したと伝えられます。

伊能図の優品

今日、わたしたちがみている伊能図は、③副本、④写本、⑤下図・稿本のいずれかです。なかでも数が多いのは写本です。当館所蔵の「伊能小図 西日本」(図2)「伊能小図 北海道」は優品ですが、どちらも写本です。それでは正本や控本はどのようなものだったのでしょうか。残念ながら灰燼に帰した本物を見ることはできませんが、大名家などに残された副本をみることで、在りし日の姿をうかがうことができます。

その一つが、松浦史料博物館に所蔵されている伊能図です。文化2年(1805)の西国測量の廻状に接した松浦静山は、伊能に会い、「且事畢、帰府ノ上、領内測量ノ地図一本ヲ予ニ贈ルベシト約シテ、伊能モ諾シタリ」(『甲子夜話』卷廿八)と、領内測量図を貰う約束を綴っています。しかし、この約束を果たす前に忠敬は病死していたため、代わりに弟子の下河辺政五郎や保木敬蔵らが絵図を作成して献呈することになります。同館が所蔵する副書にある「御領分中并長崎之図・九州一円之図、都合七枚」がそれに該当します。

大名家旧蔵の伊能図は、献呈品として正本に準じた仕立てと考えられています。例えば、下図や写本は楮から作られた和紙に描かれています。大名家旧蔵図の一部は、竹で作られた紙(竹紙)を用いていることが確認されています。こうした特徴をみることで、幻の正本がどのようなものであったか、その実態に迫れるのではないのでしょうか。

展覧会では、蜂須賀家旧蔵図(徳島大学附属図書館蔵)や、毛利家旧蔵図(山口県文書館蔵)を展覧し、優品の数々にふれていただく機会を創出したいと思えます。

伊能図の「針穴」

伊能図は、いくつもの線分をつなげて海岸線や街道を表しています。伊能図のなかには、この線分の両端に、小さな穴(針穴)が施されている図が確認できます(図3)。これも伊能図の特徴の一つです。

伊能図の作成に際しては、測量結果に基づいた針穴のある下図をもとに、浄書用の紙を重ね合わせて、針を貫通させて写すことで正確を期していたとされます。また、同様の図を複数作成する際にもこの手法が用いられたようです。ちなみに、この針穴は、線分の両端のみならず、コンパスローズや構造物にも施されている場合もあります。

針穴はとても小さいために、肉眼での観察も困難なのですが、高精細画像データをを用いることによって、つぶさにそれを確認することができ、展示ではパネルなども活用しながら、ミリ単位の世界に迫ってみようとも考えています。

200年の時を経て色褪せない伊能図。その魅力を、最新の研究成果を交えながら紹介いたします。どうぞ楽しみにお待ちください。



図3 「近江国及附近絵図」(淀城周辺) 江戸時代後期～明治時代初期
左は逆光、右は順光で撮影 当館蔵

前期…7月10日(土)～8月1日(日)
後期…8月4日(水)～29日(日)
(永山 未沙希)

コレクション展示
美術

輸出漆器

令和3年4月3日(土)～
5月23日(日)
江戸時代に、海外への輸出品としてつくられた漆工芸品を紹介します。



「蔭絵肖像図」フナケト
(POLIDORE CALDARA) 江戸時代後期

司馬江漢「天球全図」

ひろい世界のちいさな人間

令和3年5月25日(火)～
7月4日(日)

太陽系から微細な虫へとズームインする、破天荒な司馬江漢の銅版画集を紹介します。



司馬江漢「天球全図」以顕微鏡観虫類図」
江戸時代後期

コレクション展示
聖フランシスコ・ザビエル像 実物展示

令和3年4月24日(土)～
5月23日(日)

天文18年(1549)のフランシスコ・ザビエルの来日は、日本とヨーロッパの文化交流の端緒となる出来事でした。西洋の信仰と南蛮美術に代表される洋風趣味は、江戸幕府の禁教政策によってやがて下火になりますが、その中で密かに描かれ伝えられたのが、当館が所蔵する「聖フランシスコ・ザビエル像」です。

このようなザビエルの単身像は、1620年代に日本でも複数描かれたと推測されますが、現存するのはこの作品だけです。

文化財の恒久的保存の観点から、期間を限定して実物展示を行います。今年には春季の公開となります。お見逃しなく。



重要文化財
「聖フランシスコ・ザビエル像」
江戸時代初期

コレクション展示
びいどろ・ぎやまん・ガラス

彩のびいどろ

令和3年4月3日(土)～
5月30日(日)

ガラスは様々な金属を混ぜることで発色しています。色とりどりのびいどろをお楽しみください。



「緑色ガラス」形ガラス徳利
江戸時代(1772-1844頃)

近代大阪のガラス

令和3年6月1日(火)～
7月25日(日)

明治時代以降、ガラス製造が盛んであった大阪のガラス器を展観します。

手彫り薩摩切子

令和3年7月27日(火)～
8月29日(日)

江戸時代の切子を代表する薩摩切子。手彫りならではの、やわらかく、美しい輝きに触れる機会となれば幸いです。

コレクション展示
古地図

西洋古版図①

令和3年4月3日(土)～
5月23日(日)

日本の姿を画いたテイセラの「日本図」をはじめ、西洋で印刷された古版図を選びすぐって展覧します。



「日本図」
1595年

城下町の古地図

令和3年5月25日(火)～
7月4日(日)

県庁所在地をはじめとする全国の主要都市の多くは、近世城下町の系譜をひいています。都市の原風景ともいえる、城下町の絵図から往事の姿をお楽しみください。

特集展示
四季の祈り―神戸中世の儀礼空間

令和3年7月10日(土)～8月29日(日)

四季折々の美しい表情を見せる神戸。山と海、豊かな自然に恵まれ、京にもほど近かったこの地で数百年前に生きた人々は、何を想い、どのような生活をおくっていたのでしょうか。当時、生きた人々の視、聞き、感じた世界を追体験してみたい...。そのようなことを想いながら本展を企画しました。当館のコレクションや神戸の神社からお預かりしている貴重なご宝物を通して、中世の人々の祈りの世界を感じていただきます。たら幸いです。

春 涅槃会―生命の輝き

「涅槃会」は、仏教の開祖・釈迦が人間としての生を終えたときされる日に行われる行事です。「仏涅槃図」という絵画を前に、苦しみのない理想郷である涅槃に旅立った釈迦に想いを馳せ、現世に生きる全ての生命の尊さを見つめます。

夏 大般若経会―豊年への祈り

一年間、無病息災で、豊かに生きることができるよう...。いつの時代も変わらぬ人々の願いではないでしょうか。最大規模の経典「大般若経」

コレクション展示
考古・歴史

和装にも洋装にも合う!

「束髪」ヘアアレンジ集
令和3年4月3日(土)～
5月23日(日)

明治時代に、婦人束髪会によって提唱された、新しい髪型「束髪」。当時のパンフレットや錦絵とともに、「束髪」の結び方を紹介します。



安達隆光「大日本婦人束髪図解」(部分)
明治18年(1885)

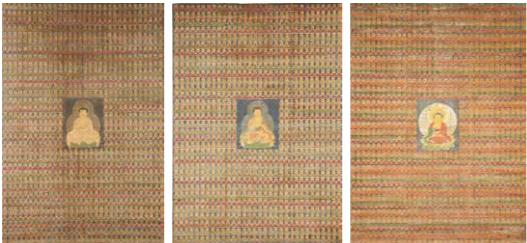
戦を描く

令和3年5月25日(火)～
7月4日(日)

源平合戦、南北朝内乱など、神戸は日本の歴史上、転機となった戦が行われた場でした。神戸を舞台とした戦がどのように伝えられ、人々に認知されてきたかを紹介します。



【春 涅槃会】仏涅槃図 暦応2年(1338) 須磨寺蔵



【冬 仏名会】三千仏図 暦応2年(1338) 須磨寺蔵



【夏 大般若経会】大般若経 平安時代



【秋 彼岸会】阿弥陀三尊来迎図 室町時代 妙法寺蔵

地図を片手に京都見物

―代官手代が見た京都―

前号（118号）の新収蔵資料の紹介で「浪華名所一覧」をとりあげ、「本資料のような一枚摺のデータを片手に往時の景観を訪ねてみたい」としました。今もそれは叶っていませんが、小稿では一枚の古地図から、とある人物の地図活用的一端を探ってみました。

テキストとするのは、当館の南波松太郎コレクションの「京都図（仮）」（京都図82）です。表紙が欠落しているので地図の外題は不明なのですが、「絵図洛土池田東籬主人」「画工全井上春曙齋」「天保十一年子初春発行京絵図株元京三条寺町竹原好兵衛梓」とあるので、「天保改正京都指掌図」と推定できます。『京都図総目録』¹によれば、「文化124（筆者注：『文化改正京都指掌図』を元版とし、文久二年151（筆者注：『文久改正京都指掌図』には重版し、竹原のベストセラー四種のうちの1）つとされています。『指掌図』とは聞きなれない言葉かもし

れませんが、掌に載るコンパクトな図を意味します。大きさは、52・2×71・4cm。一寸、掌には載らないサイズですが、折り畳みの地図なので、両手を使って扱ければ十分に活用できるものと思われま。京都観光にはうってつけの地図といえるでしょう。

表紙が欠けているとしましたが、裏表紙には「天保十一年十一月、二條御詰米出役中、洛陽見物為案内求之 宮部藤原式臣」との朱書が確認できます。宮部なる人物が、二条城に蔵詰の米を運ぶ仕事で来た天保11年（1840）11月に、洛陽（京都）見物の案内のために図を買収したというのです。二条城の詰米は、もともと幕領からの年貢米を、軍費用の物資として蓄えていたものです（後には在京役人の扶持米や市中への流通米などに）。この詰米は、延享2年（1745）以降、山城・和泉・河内・摂津・近江・播磨・美作・備中・備後などの幕領から運ば

れた（近江は寛政2・1790年以降は大津御蔵納）とされています²。

となると、宮部はこの地域に置かれた代官所の下僚であったと思われる。幸いなことに、撰河泉播に設置された代官所の下僚などを列記した天保11年の刊記を有する『大坂便用録』なる資料が遺されています（大阪市立中央図書館蔵）。この冊子を通覧すると、谷町代官池田岩之丞（天保7年〜同10年まで在坂、後任は竹垣直道（天保11年9月〜）の下僚として、「廻舟方宮部潤八郎」

「同（御手代）宮部孫八良」の2人が確認できます。これだけでは、推測に留めざるをえなかったのですが、札幌農学校教授などを歴任し、学士院会員にもなった農学者宮部金吾の伝記に、「父は孫八郎式臣、文政二年八月二十五日三河國赤坂に生れ、（略）天保四年十五歳の時、柴崎を出て大阪に到り、代官池田氏の谷町役所の見習となり、九年には手代となった」³とあることを知りました。推測が確信に変わった瞬間でした。さらに同書には、金吾の祖父が「潤八郎美臣」であったとも記されています。潤八郎は孫八郎の父で、親子共々谷町代官所で下僚として働いていたのです。なお、代官竹垣は長期



写真1 「京都図（仮）」に施された朱点（洛東部分）
建仁寺、知恩院、清水寺などには朱点を確認できる。

間にわたり日記⁴を残していますが、天保11年は9月1日から15日までしか記載がなく、残念ながら孫八郎の京都派遣についてはたどれません。さて、孫八郎は購入した「天保改正京都指掌図」をもとに、どこに見

物に出かけたのでしょうか。地図にある寺社や地名に施された朱点（写真1）が、その手がかりと考えて間違いないでしょう。おそらく、孫八郎は図を片手に訪れた地に朱点を付していったものと考えられます。そこで、この朱点を拾い上げたのが表1です。便宜的にエリアを洛中

から洛西に5分割しました。比叡山のようにエリアを超えている場所もありますが、この点はご容赦を。その数、なんと134か所！。

この一覧からは、洛中洛外に限無く見物に向き、特に賀茂川を超えた洛東の随所を訪れていたことがうかがえます。「銀かくし（闇寺）」「知恩院」「清水寺」をはじめ「三十三間堂」など、今も観光地としてよく知られた場所です。洛中では、「禁裏御所」をはじめ、寺町周辺と東西

本願寺、さらには「嶋原」などにも出向いています。

一日をかけての行程だったのでしようか、洛北では「くらま（鞍馬）寺」や「貴ふね（船）」、洛南では宇治郡の「黄ハク（槩）山」万福寺や「平等院」周辺、洛西では桂川を超えて「向日明神」「光明寺」「長岡天神」さらには「柳谷観音」の地を訪れています。旧暦11月だったことを考えると、標高の高い地はかなり寒かったかもしれません。

洛西では、「平の（野）社」「金かく（闇）寺」「等持いん（院）」「龍安寺」といった社寺のほか、「愛宕山」にも足を運んでいます。「上さか（坂）」から「愛宕山」までの道は、現在でもハイキングコースとなっております。「清たき（瀧）」から「愛宕山」までは急な坂道で一気に800mを登ることになります。

愛宕山山上は、文化2年（1805）閏8月6日から京都市中の測量をはじめた伊能忠敬ら一行も、11日

に高橋、坂部、永澤らが愛宕に参詣したあと、「山々方位ヲ測」（伊能忠敬記念館蔵『忠敬先生日記十四』）つたように、見通しの良い場所でした。黄華山の「華洛一覽図」や歌川貞秀の「京都一覽画図」などは、この場所の上空から京都市中そして東山にかけて俯瞰した様相を画いたものです。

孫八郎この時22歳。昔の人の健脚を考慮しても、小稿で紹介した場所を廻るとなると、少なくとも一週間を要したのではないのでしょうか。そしてこの旅で、孫八郎は十分なまでに京都の魅力を手得したと考えられます。（小野田 一幸）

表1 宮部の洛中洛外での見物場所

洛中	洛東	洛南
1 禁裏御所	1 双りん塔	1 せんゆう寺
2 仙洞御所	2 比叡山	2 東ふく寺
3 廬山寺	3 山中こへ	3 いなり
4 中御霊	4 しら川村	4 藤もり
5 下御霊	5 干菜寺	5 こいつり
6 草堂	6 吉田社	6 恋ツカ
7 本能寺	7 銀かくし	7 御香宮
8 誓願寺	8 吉田殿	8 黄ハク山
9 いつみ武部	9 吉田村	9 はし寺
10 とら薬師	10 真如堂	10 円通
11 円ふく寺	11 黒谷	11 離宮
12 安養寺	12 聖護院宮	12 恵心院
13 せん長寺	13 光雪寺	13 興正寺
14 にしき天神	14 若王子	14 うめ石
15 四条道せう	15 熊の社	15 はしひめ
16 祇園御たび	16 永くハん堂	16 うちノ町
17 御影堂	17 南禅寺	17 縣社
18 東本願寺枳殻殿	18 金地院	18 扇のしバ
19 オイケ八マン	19 頂妙寺	19 つりどの
20 六角堂	20 法林寺	20 平等院
21 佛光寺御門跡	21 けあげ	
22 東本願寺御門跡	22 ひの丘	1 平の
23 しんぜんゑん	23 青蓮院宮	2 平の社
24 大たび	24 庚申	3 金かく寺
25 岩神	25 知恩院宮	4 かゝミ石
26 本圀寺	26 知恩院	5 等持いん
27 本願寺御門跡	27 きおん社	6 仁和寺宮
28 般舟院	28 メヤミチザウ	7 龍安寺
29 北野天満宮	29 建仁寺	8 鳴たき
30 大將軍社	30 安井御門跡	9 清凉寺
31 壬生寺	31 圓山	10 上さか
32 嶋原	32 長楽寺	11 二尊院
33 大通寺 六孫王社	33 東大谷	12 妓王寺
34 東寺	34 二けん茶や	13 一ノ鳥井
35 イナリオタヒ	35 双りん寺	14 こゝろミノ坂
	36 高だいじ	15 清たき
	37 八さか	16 火伏コンケン
	38 清水寺	17 愛宕山
	39 子安塔	18 太秦
	40 とりへ野	19 廣りうし
	41 大谷	20 庚申
	42 清閑寺	21 朱雀
	43 大佛殿	22 向日明神
	44 耳ツカ	23 光明寺
	45 つりかね	24 長岡天神
	46 三十三間堂	25 柳谷観音
洛北		洛西
1 下鴨明神		1 平の
2 上賀茂明神		2 平の社
3 市原		3 金かく寺
4 小早寺		4 かゝミ石
5 二の瀬		5 等持いん
6 くらま寺		6 仁和寺宮
7 僧正谷		7 龍安寺
8 貴ふね		8 鳴たき

1 大塚隆『京都図総目録』青雲堂書店、1998年、53頁
 2 飯島千秋「江戸幕府の蔵米（1）」『横浜商大論集』34（1）、2000、104頁
 3 宮部金吾博士記念出版刊行会『伝記叢書23 2 宮部金吾』岩波書店、1953、8頁
 4 谷町代官在勤時の日記は、藪田貫編『大坂代官竹垣直道日記』（一）〜（四）、関西大学などにわ・大阪文化遺産学研究センター、2007〜2010に翻刻されている。竹垣が関東代官に転じてからは、西沢淳男によって『地域政策研究』誌上で翻刻が進められている。
 付記：本稿は、JSPS科研費基盤研究（A）18H03603の助成を受けたものです。

長田区 蓮池残照―常福寺板卒塔婆の神秘



神の山・高取山の麓

神戸を東西に背骨のように走る六甲山系の独立峰・高取山(標高328m)。その山麓の須磨区側に、禅昌寺、妙法寺、長田区側に明泉寺、長田神社などの古刹・古社を擁する、古来信仰を集めた聖山です。この高取山の南斜面に、美しい蓮が咲き誇る池があったことを皆さん、ご存じでしょうか。

蓮池と蓮華寺

現在は、西代蓮池公園として整備され、周囲の人たちの憩いの場となっている地がその蓮池の跡です。

この蓮池は、奈良時代の名僧・行基が人々のために造成した溜池に起源があると言われています。

また、この蓮池の南側を古代の幹線道路・山陽道が走っており、交通の要衝でもあったことから、しばしば合戦の舞台ともなりました。

『平家物語』では、一ノ谷の戦い(寿永3・1184年)に敗れた平重衡についての記述の中に蓮の池が登場し、また、『太平記』では湊川の戦い(延元元・1336年)の舞台の一つとして登場します。それによると、楠木正成の軍勢から逃げる足利直義を守るため、直義の家臣・葉師寺十郎次郎が「蓮池の堤」で孤軍奮闘したことが知られます。物語のダイナミズムを味わっていただくために、該当部分を次に引用しておきます。

●『平家物語』巻第九「重衡生捕」
「汀にはたすけ舟いくらもありけれども、うしろより敵はおっかけたり、のがるべきひまもなかりければ、湊河、刈藻河をもうちわたり、蓮の池をば馬手に見て、駒の林を弓手になり、板宿、須磨をもうち過ぎて、西をさいてぞ落ち給ふ。」

●『太平記』巻第十八
「大将左兵衛督の乗り玉へる馬、鏃を蹄に踏みたてて、右の足を引きける間、楠が兵ども攻め近づいて、すでに討たれ給ひぬと見えけるところに、葉師寺十郎ただ一騎、蓮池の堤に返し合はせて、馬より飛び下りて、二尺五寸の小長刀の石突を取り延べて、」

蓮華寺ゆかりの板卒塔婆

このような多彩な歴史に彩られた「蓮池」ですが、実はこの蓮池にまつわる神秘的な宝物が、近隣に所在する常福寺に伝来しています。それが、写真の板卒塔婆です。もとは、蓮池を造成した行基が造立した蓮華寺の宝物だったものを、常福寺が引き継ぎ守り伝えてきたといえます。さらに、興味深いことに、この卒塔婆は、「蓮池」の樋(灌漑設備)の余材で造られたというのです。地・水・火・風・空という、世界を構成するエレメントの表象である五輪塔の形に仏を彫り出したこの卒塔婆は、他に類例がない大変珍しいものです。端正優美な仏の相好から、制作年代は平安時代後期・11世紀〜12世紀に遡ると考えられます。

なんとも不思議な五輪塔ですが、どのように使用されていたのでしょうか。実は、寺伝では、高取山頂にこの五輪塔を運び、地面に立てて、雨乞いをおこなっていたと言われています。

1300年前に誕生した、人々の命を育んだ蓮池。そこから連想される「水」のイメージが、この卒塔婆には息づいているのです。時代は移り、大きく変わってしまった風景の中に、

新収蔵資料

観艦式パノラマ写真

近代日本の観艦式は、海軍の艦船を港湾に集め、天皇がその様子を観閲する行事です。昭和5年(1930)10月26日には、神戸沖で行われました。

一般の人々も、式場付近を航行する拝観船や陸上からその様子を見ることができたので、多くの旅客が神戸を訪れました。観艦式に合わせ、神戸市を主体とした大規模な博覧会も開催されています。

本資料は、この昭和5年の観艦式の様子を記録するため、公式に撮影されたパノラマ写真です。令和2年(2020)に、個人の方からご寄贈いただきました。

『海軍特別大演習観艦式記録』(兵庫県、1931年)によると、当初は、記録用として記念誌約1500部を印刷して、関係者に配布する予定でした。しかし、予算が著しく削減されたこと、また、「記録を配布

しても熟読する人は少ないので、写真と関係方面に記念として配布する方がよい」という当時の兵庫県知事高橋守雄の意見もあって、式場全体を記録することができるパノラマ写真の制作が決まりました。

写真を撮影するにあたり、①御召艦(天皇が搭乗する艦)を中心とし、観艦式式場における艦列全部を一葉に収める②海上・山などのふさわしい場所を撮影する③天地幅8インチ、横幅4フィート以上とする④撮影部数は1000部とし、1枚2円以下とする等の仕様が定められました。

撮影請負者は、神戸の写真師を中心に厳選して選考した結果、キヨタ写真館(神戸市日暮通一丁目)の清田喜三郎が撮影者となりました。請負代金は1000枚で1800円、納入期限は11月20日と定められました。

撮影は、予行演習と観艦式当日の2回行われました。予行演習時には、軍艦「陸奥」に撮影場所を設けています。ところが、荒天だったため遠景を十分に展望することができず、かつ撮影場所が近すぎたこともあって、式場全体をうまく収められなかったといえます。

そこで、観艦式当日は、神戸市敏馬沖に係留された日本郵船会社の持船



「観艦式パノラマ写真」昭和5年(1930)



部分拡大

「これや丸」から撮影を行いました。この時は天候にも恵まれて無事撮影を終えることができ、納品された写真は、関係者に配布されました。このパノラマ写真を当館にご寄贈くださった方は、写真を受け取った観艦式関係者のご子孫です。来歴が明確にわかっていることも、本資料の貴重性を高めているといえます。(水嶋 彩乃)

活動記録



令和2年11月19日
ミュージアム講座「日本へのまなざし―世界と繋がる着色写真―」



令和2年11月7日
ギャラリートーク「古墳時代の造形」



五輪板卒塔婆 平安時代 常福寺蔵 神戸市指定文化財

変わらずたたずむ高取山。山を見上げながら、古代・中世の面影を探してみたいかがでしょうか。(川野 憲一)